

乳価値上げでメーカーへ要望 管内メガファーム結束

2014年3月10日

2014年度の乳価交渉で、十勝管内の大規模牧場「メガファーム」が結束して値上げと早期決着を求める動きを強めている。十勝酪農法人会（湯浅佳春会長、33法人）は2月21日にホクレンを訪問して乳価値上げを要望、今月11、13日には乳業メーカーを直接訪れる予定だ。10円程度の値上げを要望しており、5円以下で決着した場合は自主的に生乳生産を減らす生産調整も辞さない構えだ。

飼料や燃料の高騰が経営を圧迫していることを受けた行動で、同会がこうした動きに出るのは初めて。

生産者に支払われる乳価はホクレンと乳業メーカーが交渉し、飲用やチーズ、バターなど用途別に価格を決める。4月から新価格を適用することになっているが、ここ数年は交渉が難航し、決定が遅れることが続いていた。

2月21日のホクレンへの要望活動は同会の会員12人が参加。非公開で行われ、ホクレンは板東寛之常務らが対応した。

同会によると、会談で交渉相手である乳業メーカーに対して直接要望する案が出たことから、酪農家の窮状をメーカーにも訴えることにした。

11、13日には明治（本社東京）、雪印メグミルク（同）、よつ葉乳業（本社札幌）の十勝にある工場を訪れ、値上げを要望する。

メガファームは明確な定義はないが、年間生乳生産量

3000ト、経産牛頭数300頭以上の経営規模とされる。乳牛約1500頭を飼育する友夢牧場（新得町）の社長でもある湯浅会長は「乳業メーカーに直接要望するのはこれまでにない。道内の生乳生産が落ち込んでいるのは乳価が安いから。真剣に値上げを考えてくれなければ離農が止まらない」と話している。

<乳価>

2013年度の乳価は昨年7月に決定。10月から生乳1キロ当たり平均価格（プール乳価）で70銭引き上げることで乳業者と合意した。プール乳価は用途別の平均で、飲用向けが114円40銭（1キロ当たり5円値上げ）、チーズ向けが53円（同1円値上げ）。バターや脱脂粉乳などの加工向け（同70円96銭）と生クリーム向け（同75円50銭）は据え置かれた。チーズ向けは4月にさかのぼって適用された。

乳価値上げ要望 十勝酪農法人会・湯浅会長に聞く

2014年3月22日

新年度の乳価交渉で、十勝酪農法人会（湯浅佳春会長、33社）が乳業メーカー、ホクレンに対し酪農家自らによる異例の値上げ要望に乗り出した。乳牛約1500頭を飼育する友夢牧場（新得町）の社長でもある湯浅会長（64）に要望の背景や目的を聞いた。

「生産と雇用 守る価格に」



—なぜ要望活動に動いたか。

このままでは北海道の酪農が駄目になってしまうという危機感がある。道内には約6000戸の酪農家がいるが、1年に200戸以上が離農する今の状況が続けば、生産者がいなくなってしまう。飼料や燃料などが高止

まりする中、今の乳価では酪農家が再生産できない。

今年度、道内生乳生産量は減少に転じている。環太平洋連携協定（TPP）への不安や猛暑が影響したと言われるが、再生産できないほどの乳価で生産意欲が減退し

ているのが大きな理由と考えている。若い経営者が意欲を持てる乳価設定が必要だ。

—要望の手応えは。

世界的にも需要増で乳価が上がっており、消費増税もあって乳業メーカーも厳しい状況だと感じた。量販店、消費者の動向は重要だし、生産者も消費者とともにあるべきだ。値上げが乳製品離れにつながるという考えもある。しかし、このまま国産の生乳減産が続けば、食卓からバターやチーズなど乳製品が消える。チーズの需要も伸びているのに、乳製品離れが起きるのは必至だ。

—乳価が上がらなければどうなるか。

全道で唯一前年並みの生産を確保する十勝も、個々の経営判断で飼料代を削減する者が出てくれば、減産に転じる恐れがある。公共事業増などで人手も不足している。

十分な賃金や雇用条件が確保できなければ、従業員も